

日本子ども社会学会 学会ニュース

第 34 号 (2019/1/15)

日本子ども社会学会 事務局・広報委員会
〒152-0004 東京都目黒区鷹番三丁目 6 番 1 号 内外出版株式会社
Fax : 03-3712-3130 E-mail : jscs@naigai-group.co.jp

目次

第 26 回大会開催校から…………… 1	テーマセッション報告……………3
第 25 回大会、研究集会報告…………… 2	各委員会から……………6

第 26 回大会開催校から

第 26 回大会実行委員長：石黒万里子（東京成徳大学）

昨年の七夕は、悪天候のために、年に一度の逢瀬が叶いませんでした。全国の日本子ども社会学会会員のみなさまにおかれましては、織姫と彦星に負けないくらい残念な思いをされたことと拝察いたします。第 25 回大会実行委員会のみなさまには、大変なご準備の労をいただきながら不参集という苦渋の決断をされ、事後の対応にもご尽力いただきましたことに、あらためまして心からの敬意を表します。12 月には研究集会を武庫川女子大学で開催していただき、重ねてのご負担をいただきながら心温まるおもてなしをいただきましたこと、深く感謝申し上げます。

ご意志を引き継ぎまして、2019 年 6 月 29 日（土）と 30 日（日）に、私ども東京成徳大学の東京キャンパス（十条）で、第 26 回大会を開催させていただくことになりました。東京成徳大学には、現学会長の永井聖二先生をはじめ、比較的多くの会員が在籍しております。とはいえ恥ずかしながら学会大会運営に慣れておらず、様々にいたらない点が目立ってしまうことを案じております。会員のみなさまにご迷惑をおかけしてしまうこともあるかと存じますが、なにとぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

本学での開催は、2006 年の第 13 回大会以来 13 年ぶりと伺っております。ご存知の会員の方も多くおられるかと存じますが、東京キャンパス（十条）は池袋や新宿といった大繁華街からのアクセスも良く、また最寄り駅の埼京線十条駅からは徒歩 5 分です。十条は都心にほど近いながら昭和情緒の残る人

情味にあふれた地域で、昔ながらの商店の方々や、多様な国際的文化的背景の方々が混ざり合い、絶妙なハーモニーを奏でております。大学の近隣には、篠原演芸場や十條銀座などの懐かしくも新鮮な名所や、魅力的な飲食店が豊富にございます。大会にお越しの際にぜひお立ち寄りくださいませ。

なお今大会では、学生会員の方の参加費を 2000 円、懇親会参加費を 3000 円とさせていただきました。学生のみなさまが少しでもお越しいただきやすくなりましたら幸いです。学生の方もそうでない方も、子ども社会学会会員のみなさまも非会員の方も、織姫様も彦星様も、今年の 6 月最後の週末はぜひとも十條にご参集ください。そして、土曜の夜は 2 年分の懇親を深めましょう。1 人でも多くの方々のご参加を心よりお待ちしております。

第 25 回大会、研究集会報告

第 25 回大会実行委員長：安東由則（武庫川女子大学）

2018 年 7 月 7 日（土）・8 日（日）、武庫川女子大学にて開催予定であった日本子ども社会学会・第 25 回大会については、西日本を襲った豪雨により中止（後、不参集）という苦渋の決断をいたしました。学会中止などあってはならないことですが、それまでの降雨の状況とその後の予報を基に判断をした次第です。結果として、会員の皆さまはもちろん、シンポジウムやテーマセッションに参加予定の先生方、その他学生アルバイトや懇親会等、多くの方に多大なご迷惑とご負担を掛けてしまい、誠に申し訳なく、心よりお詫びする次第です。

大会中止後の片付けや学内外への挨拶を行いながら、さすがに落ち込んでいた 7 月終わり頃、永井聖二会長と山田浩之事務局長より、会員の発表機会を確保するためにも、初めての試みである「研究集会」を武庫川女子大学で開催してはどうかとの提案をいただきました。私どもといたしましては、会員の皆さまに迷惑をお掛けした分、多少なりとも学会への貢献ができればと考え、お引き受けすることといたしました。発表募集やプログラム作成等は、事務局の西本佳代会員、尾川満宏会員が担当してくださり、順調に準備を進めることができましたと思っています。

12 月 2 日（日）の「研究集会」は小春日和の中、開催することができました。研究発表をされる会員はもとより、7 月に予定されていた 2 つのテーマセッションについても当初の予定通り非会員の提案者にもご参集いただくことができ、少しは胸のつかえが取れた気分です。お名前を出して恐縮ですが、岩手県奥州市から参加いただいた高橋公子会員は、7 月の大会の際、不参集の連絡が届かずに大会会場まで来られ、私が対応いたしました。そのようなことがあったにもかかわらず、遠路を再びお越しいただき、感激した次第です。

研究集会では、15 件の発表と 2 つのテーマセッションがあり、60 名の参加者がありました。通常学会の三分の一程度となりましたが、予想を上回り、引き受け校としては非常に喜んでいるとともに、参加していただいた全ての皆さまに感謝している次第です。

集会の運営に関しては、経費削減のため学生アルバイトを雇いませんでしたので、広島大学の院生会員には受付等で大変お世話になりました。また、個々の名前は挙げませんが、7 月の大会実行委員を引き受けて頂いた会員にも、引き続き負担をお掛けしました。お礼を申し上げます。この他、お世話になった多くの方々に、謹んで感謝申し上げます。

今年度の大会中止（不参集）から学ぶものがあるとすれば、今後も起こりうるこのような事態に対し、学会としてどう備え、どのような意思決定や連絡体制を整えておく必要があるかという課題が突き付けられたことであり、今回の「研究集会」は一つの対応策として位置付けられたかと思います。この教訓が次に活かされれば幸いです。

次年度大会校におかれましては、引継ぎが遅くなり、ご迷惑をお掛けしています。ただ、次年度大会校は永井会長をはじめ、多くの会員がおられると聞き及んでおります。石黒万里子実行委員長を中心に、素晴らしい大会となりますことを確信しております。後は、天気に恵まれますことを心より祈るばかりです。

テーマセッション報告

以下に報告する2件のテーマセッションは、当初、2018年7月の日本子ども社会学会第25回大会で実施される予定でしたが、西日本豪雨により同大会が不参集となったため、2018年12月2日に武庫川女子大学で開催された研究集会で改めて実施されました。テーマセッションの実現に向けてご尽力いただいた、大会実行委員会のみなさま、事務局のみなさま、そしてご多忙のなか再度日程を調整してゲストスピーカーとしてご登壇くださった足立まな氏と Aung Ko Ko Lynn 氏にお礼申し上げます。

(研究交流委員長・多賀太)

テーマセッションⅠ 「児童文学とジェンダー」

児童文学は、子どものみならず、子どもに本を手渡す保護者や教員などの媒介者をも読者対象としたジャンルである。このようなジャンル特性ゆえに、児童文学には子どもを社会化する役割が期待される一方で、児童文学を通じた従来の社会規範の相対化やそこからの子どもの解放といった試みもなされてきた。児童文学において、ジェンダーはこうした社会化をめぐるポリティクスが最も顕著に見られるテーマの1つであり、すでにジェンダーの視点からの児童文学研究には多くの蓄積がある。しかし、その多くは少女を対象としており、少年についての検討はいまだ不十分である。また、トランスジェンダーや同性愛などを含む多様な性のあり方についてはほとんど検討されていない。

そこで本セッションでは、少女のみならず、少年や LGBT も視野に入れつつ、児童文学を通じてジェンダーが再生産されたり更新されたりする可能性について、文学作品の作り手としての児童文学作家、子どもに対する文学作品の媒介者としての教師、そして児童文学の研究者という異なる三者の立場から話題提供を行い議論することとした。なお、当初登壇予定であった児童文学作家のひこ・田中氏は、ご病気のため残念ながらご登壇いただくことができなかった。

第1報告者の足立まな氏（丹波市立春日部小学校）からは、「絵本と学ぶ多様な性—授業実践をとおして」と題して、『わたしはあかねこ』という絵本を用いた小学1年生対象の授業実践が報告された。この絵本は、家族の中で自分だけが赤毛であるあかねこが、親やきょうだいから毛色を変えるよう働きかけられることに我慢できずに家を飛び出した後、あかねこと結ばれて、それぞれに毛色の異なる七匹の子猫をもうけ、新しい家族で幸せに暮らすという話である。本授業実践は2回シリーズで構成されており、第1時は、絵本の内容を理解したうえで、もとの家族にいたときと新しい家族ができたときのあかねこの気持ちを想像し、決めつけや思い込みについて考えるというもの、そして第2時は、足立氏による絵

本の続編に基づいて七匹の子ねこの性別について考え、体の性別と心の性別が一致するとは限らないことなど、多様な性について知るというものであった。報告では、まず絵本の朗読が行われた後、授業計画の説明と授業後の子どもたちの感想の紹介がなされた。感想からは、本授業を通して子どもたちが、思い込みや決めつけから自由になり、自分の気持ちや他人の気持ちがそれぞれ違っていても受け入れ肯定することの大切さを実感したことが伝わってきた。

第2 報告者である研究交流委員の目黒強会員（神戸大学）からは、「児童文学の正統化とジェンダー—男の子像の揺らぎに着目して—」と題して、性の多様性を含めた男の子像の揺らぎに焦点をあてつつ、青少年読書感想文全国コンクール課題図書に選定されたり各種文学賞を受賞したりした児童文学作品の検討が行われた。例として、同性に恋心を寄せる小学5年生の男の子が当たり前のように描かれている『ぼくたちのリアル』（戸森しるこ、講談社、2016年、第63回課題図書）、自らは母親から女らしい振る舞いを求められることに抵抗しながらもままごとが好きな弟の振る舞いを馬鹿にしていた女の子が、弟のあり方を受け入れていく姿を描いた『サッコがいく』（泉啓子、童心社、1994年、第41回課題図書）、旅芸人の一座で女形を演じている男の子が当たり前のように家事と育児をする様子や、彼を「おんなおとこ」だと馬鹿にしていたガキ大将が最後に女役を志願して演じる様子を描いた『さらばゆきひめ』（宮本忠夫、童心社、2002年、第8回日本絵本賞）などを挙げ、内容の検討が行われた。それらをふまえて目黒氏からは、多様な性のあり方を描く児童文学作品が課題図書に選ばれたり文学賞を受賞したりして正統化されることの効果の両義性についての提起がなされた。一方で、ポジティブな側面として、知名度が上がってより多くの子どもたちに読まれるようになること、それによって典型的な男女像に収まることに居心地の悪さを感じる子どもたちがエンパワーされたり、性的マイノリティ当事者ではない読者が登場人物への追体験を通して性の多様性を学習できることが指摘された。他方で、ネガティブな側面として、課題図書に選ばれることがそこに描かれた性の多様性を「正しいもの」と思わせる効果を持ち合わせているのだとすれば、性の多様性を排除した作品が課題図書に選ばれた際には以前の効果は容易に打ち消されてしまうことや、性の多様性を認めることに反対する陣営から課題図書のあり方自体が批判されてしまう懸念が示された。

続いて、司会を務める研究交流委員の多賀から、メディアとジェンダーについての補足説明がなされ、質疑応答が行われた。児童文学においても多様な性を描くことがマーケティングの手法として利用される可能性、小学校の低学年に性の多様性をいかに教えるか、文学作品をジェンダーの視点から評価する際の評価基準とはいかなるものか、ジェンダーや人権の観点から望ましいと思われる授業実践や文学作品がバッシングを受けた場合にどう対処すべきかなどをめぐって、フロアとの活発な議論が行われた。

（多賀太／関西大学）

テーマセッションⅡ 「きょうだい関係とは何か —個別性と関係性を探る—」

きょうだいの存在（あるいは不在）は、子どもの生活に大きな影響を与えるものである。本テーマセッションでは、きょうだい関係が子ども社会にとってどのような役割と意味を持つのかについて論じ、きょうだい関係（および友人関係）について再考することを目指した。その際、子ども社会学会の学際性とそれゆえの独自性を生かすために、心理学・社会学の2つの立場からの話題提供と、多分野にまたがるフロアの方々とのディスカッションを通して、「きょうだい関係とは何か」について多様な視点から追究・展望しようと試みた。

第1報告の磯崎三喜年氏（国際基督教大学・研究交流委員）からは、社会心理学の立場より、「子どもの個と関係性 ―きょうだい・友人関係の視点から―」という題目で話題提供がなされた。まず、出生順については、第一子は高い社会的地位を獲得しやすく、知的レベルや達成意欲も高い傾向にあること、中間子は調整力に優れていること、末子はリスク志向性が高く、スポーツで秀でた成績を残すことなどの研究成果が紹介された。また、きょうだい数については、きょうだいが多いほど知的レベルは低下するが、離婚率も低下し、アレルギー体質になりにくいという研究成果が示された。その他、ひとりっ子の特質、きょうだい関係への認識の変化など、きょうだい関係についての幅広い知見が紹介された。

第2報告の Aung Ko Ko Lynn 氏（国際基督教大学大学院）からは、きょうだい心理学の立場より、「Birth Order Differences in Self-Evaluation Maintenance Model（自己評価維持モデルの出生順による違い）」という題目で話題提供がなされた。なお、Lynn 氏の報告は英語で行われ、磯崎氏が日本語で適宜解説するという形をとった。Lynn 氏が本報告で取り上げたのは、他者の達成が自己の評価にどのような影響をもたらすかという点に着目した、自己評価維持モデルである。それによると、人々は自己評価維持のために、高関与活動では自己の達成を心理的に近い他者より高く評価するが、低関与活動では自己の達成を心理的に近い他者より低く評価するという。しかし、そうした自己評価維持のプロセスを出生順にわけて確認すると、中間子に限っては、高関与活動でも自己と他者の達成への評価に差が見られないという。

第3報告は本稿の筆者でもある伊藤秀樹（東京学芸大学・研究交流委員）が、「進路選択ときょうだい―教育社会学の視点から―」という題目で話題提供を行った。心理学がきょうだい関係について多様な角度からアプローチを行っているのに対し、社会学ではきょうだい関係について、主に計量研究によって、教育達成の観点から検討が進められてきた。それらの研究では、生得的要因であるきょうだい数や出生順位、性別によって教育達成の格差が生じているという不平等の構造を明らかにしてきたが、いわば「親決定論」に陥っており、子ども自身が能動的に進路選択をするという視点が欠けていた。そのことをふまえて、ある高等専修学校の生徒たちへのインタビュー調査に基づき、子どもたちがきょうだいを進路に関わる存在として意味づけ、進路選択を行っている様子を提示した。

筆者にとっては、磯崎氏の報告と Lynn 氏の報告に共通していた、調和を重んじるという中間子の特性がとても興味深かった。また、同じきょうだい関係にアプローチする場合でも、心理学と社会学では導き出そうとする知見やそれを説明するモデルがかなり異なることも印象深かった。

日曜の15時40分から17時40分という時間帯にもかかわらず、10名近くの方に参加していただき、質疑応答でも貴重な質問やコメントをいただいた。きょうだい関係についての研究はまだまだ新たな可能性に開かれているということに気づかされるテーマセッションであった。

（伊藤秀樹／東京学芸大学）

各委員会から

学会賞選考委員会から

平成 29 年度日本子ども社会学会学会賞審査報告

平成 29 年度学会賞は、学会賞選考規定にもとづき厳正な選考をした結果、「研究奨励賞 A（著書の部）」に 1 名、「研究奨励賞 B（論文の部）」に 1 名に、授与することを決定した。審査報告と受賞の言葉は、学会HPに掲載した。

学会賞審査委員（研究奨励賞部門）は下記の会員。

飯田浩之（委員長）、南本長穂 新富康央 樋田大二郎 石黒万里子

研究奨励賞部門（A. 著書の部）

■授賞対象：

『高等専修学校における適応と進路-後期中等教育のセーフティネット』東信堂、2017 年 2 月

■著者：伊藤秀樹氏（東京学芸大学）

研究奨励賞部門（B. 論文の部）

■授賞対象：

「保護されるべき子ども」と親権制限問題の一系譜—児童養護運動としての「子どもの人権を守るために集会」（1968 - 77 年）

掲載誌：『子ども社会研究』23 号（2017 年 6 月発行）

■著者：土屋 敦氏（徳島大学）

なお、平成 30 年度の学会賞の推薦は昨年 10 月 31 日に締め切り、現在審査中である。

（学会賞選考委員会委員長・武内清）

紀要編集委員会から

紀要投稿に関するお願い

紀要編集委員会からお願いをさせていただきます。

現在、『子ども社会研究』25 号を編集中ですが、今回いただいた投稿論文の中に、投稿規程に抵触する原稿が複数見られました。投稿規程に抵触した場合は、せっかくご投稿くださっても査読の対象外になってしまいます。

抵触内容としましては、文字数が超過したもの、執筆者名がわかるものです。特に、執筆者名を伏せて書くという原則には十分注意を払っていただきたいと思います。執筆者名を明記しないことは申し上げるまでもありませんが、巻末の謝辞の内容から執筆者が明らかになったり、本文の内容と注の内容から執筆者がわかったりする場合もあるので、ご注意ください。

今回のことを受けて、12 月 2 日付けで投稿規程を改訂いたしました。ご投稿の際は投稿規程を熟読の上ご投稿くださいますようお願いいたします。

（紀要編集委員会委員長・加藤理）

共同研究事業委員会から

「奨励研究基金・公募」のお知らせ

日本子ども社会学会・共同研究事業委員会では、40歳未満の若手研究者を対象に、学会の発展に寄与するような意欲的試行的な研究を行っていただくため「奨励研究基金」を設置しています（研究資金：個人10万円、チーム20万円）。募集テーマは、子ども社会学会の趣旨に合うものであれば限定しません。募集期間は2019年2月1日（金）～3月15日（金）です。奨励研究助成申請用紙に必要事項を記入の上、ご応募下さい。詳細は当学会ウェブサイトをご参照下さい。

（共同研究事業委員会委員長・中坪史典）

将来構想委員会から

2018年12月に開催された理事会において、検討中の課題に関する資料を提示しました。2011年以降の将来構想委員会での議論を概観したなかで、懸案であった事務局の外部委託を2015年4月より実現したのは、1つの成果であったのですが、早くも経費増大が会計状況を厳しくさせている現状に対して、何らかの対策を講じなければならない段階であると感じています。また、会員数の推移を見ると、学会の将来を支える院生世代の数が減少傾向にあり、さらに少子化が進行するという予測の下では他の学会でも同様の傾向があるとは思われますが、その世代の活躍も引き出せるような幅広い分野・領域の交錯する活気ある学会をめざして、できる事柄から手がけたいと考えているところです。

（将来構想委員会委員長・細辻恵子）